

近代国家イデオロギー としての母子愛

加藤 美帆

この数年、NHKの朝の連続ドラマが人気らしい。そのなかのひとつ「花子とアン」（二〇一四年三月～九月放送）で、出征する息子と母親（主人公の親友）の別れの場面があった。母親を前に息子は「母を守るために戦争に行く」といったことを力強く言っていたと思う。ここでは家族という場を通じて人びとの生活とつながっている戦争が描かれているが、しかし同時に注目すべきなのは、当時若者を戦争に駆り立てていく役割を果たしていたのが、家族の情愛、なかでも母子愛だったということである。

近代以降、「家族」は個人と国家を結びつける装置として大きな役割を果たしてきた。母子の結びつきを中核においたルソーやフレイベルらの教育思想は近代国家の形成と深く結びつき、女とはすなわち良き母親であるという不文律をうちたてた。「ルソーの忠告は明快である。（中略）女は黙って堪え忍ぶこと、自分の人生を家族に捧げることを、

知らなければならぬ。なぜなら、それが、自然が彼女に割りあてた任務であり、幸福の唯一の機会だからである」（バダンテール、一九九八年、二九九頁）。それゆえそれに当てはまらない女は逸脱、異常とされた。『エミール』を愛読したナポレオンは民法典に夫の権威と妻の服従を織込んだという。家族とは人びとを自発的に秩序に従属させる効果的な装置となったのである。

明治時代の末にHomeの訳語として雑誌を通じて紹介された「家庭」概念は、都市に現れ始めた俸給生活者の夫とその妻という性別役割分業にもとづく生活を、愛情に満ちた団らんがあり、子どもの教育に心を砕く理想的な家族のあり方として広めていった。家族国家観はこうした家庭概念の普及とともに浸透した（牟田、一九九六年）。「家族のため」は総動員体制を下支えし、なかでも母子の絆は情緒に訴える強力なイデオロギーになったのである（そしてそれを

掲げるのは往々にして息子である）。

戦後、高度経済成長期を通じた近代家族の大衆化は「主婦」という生き方を女性に浸透させ、母親の役割として子どもの教育は一層強く求められていく。学歴社会の過熱と拡大を支えた要因のなかで母親の存在は小さくない。子を「戦い」に駆り立てる母親は、かたちを変えてすっかり残ったのである。ただし近代家族の閉鎖性や抑圧の構造といった矛盾が顕在化するなかで、家族のあり方は大きく問われるようになった。女性の生き方の変化は、「サラリーマンの夫と専業主婦の妻」という近代家族型の家族をもちや時代遅れのものとしている。子育てに積極的に関わる男性も注目されて久しい。それでは現代は母も子も、関係の呪縛にとらわれない生き方が主流になっていると言えるのだろうか。

近年行われた意識調査で「子どものためには、自分ががまんするのはしかたない」と回答する母親は二〇〇五年には三七・九パーセントだったのが二〇一〇年には四四・七パーセントに上昇しているという（ベネッセ次世代育成研究室二〇一〇年）。他にも子どもの教育に一層専心し親子のつながりを濃密化している親、とりわけ母親の姿を示すデータは多い。また、日々接するメディアからは「家族」に比類無い価値をおくような社会意識の高まりも感じられる。冒

頭のドラマが示していたのは過ぎ去った昔の母子ではなく、現代のイデオロギー装置としての母子愛の一端といってもよいのかもしれない。

かとう・みほ 総合国際学研究院准教授 教育社会学

愛への誘いへ文献案内

- E・バダンテール『母性という神話』鈴木晶訳、ちくま学芸文庫、一九九八年
- J・J・ルソー『エミール』下、今野一雄訳、岩波文庫、一九六四年
- 牟田和恵『戦略としての家族——近代日本の国民国家形成と女性』新曜社、一九九六年

